

# 土地に刻まれた「風」の記憶

—全国の大字地名を中心に—

## 戸井田克己

### I はじめに

#### 1. 本稿の目的

本稿では、日本各地にみられる「風」の字を含む地名から、土地に刻まれた風の記憶をたどってみたい。広く言えば、本稿は地名研究を目的とした論考であり、日本人と風との関わりを、地理学的・民俗学的に検討するものである。ここで「地理学的」とは、地名という、地理学が旧来関心を寄せてきた事物に注目することであり、かつ、その場所的意味や、全国の分布状況にも関心を払うことによる。また「民俗学的」とは、それらの地名と日本人の生活誌とを関連づけて考察しようとすることによる。

そもそも風には、「六甲おろし」や「筑波おろし」など、地名を冠したその土地固有の風があり、地方風とか、局地風<sup>1)</sup>と呼ばれている。その意味で風は、まずもって地理学的な存在と言える。一方で、日本語には風景・風俗・風潮・風紀・風物・風月・風情など、「風」の字を含む含蓄ある語彙が多い。その意味で風は、日本人にとってすぐれて民俗学的な存在でもある。

本稿では、「風」の字の持つ、この地理学と民俗学の両概念が交差するところに注目して、土地に刻まれた先人の記憶を掘り起こしていこうと思う。表題で「風」と括弧づけしたのは、風という日本語が自然現象としての文字通りの風と、前掲した様々な民俗語彙を形作る象徴的な意味合いでの風

の双方の語義を含んでいるからである。「風」の字が地名に使われた場合にも、それら両義を含む可能性がある点では同様であろう。なお、以下特に必要のない場合、自然現象としての風も、民俗語彙に含まれる風も、括弧を外して単に風と表記する。

## 2. 研究の方法

本稿では全国で風のつく<sup>おおあざ</sup>大字<sup>2)</sup>レベルの地名、すなわち大字地名を主な対象とする。日本には果たしてどれほどの、風のつく大字地名（以下、「町域名」<sup>3)</sup>と呼ぶ）があるのか。また、町域名の中には、新興住宅地につけられた、それほど歴史を持たない地名もあろう。本稿では、そうした地名も何らかの民俗的な意味合いを込めて新たに名づけられたと考えられることから、検討の対象とする。

さて、研究の方法であるが、本稿ではそうした全国の「風」のつく地名（以下、「風地名」と呼ぶ）を、「地名辞典オンライン」<sup>4)</sup>というウェブサイトですべて拾い出し、それを基<sup>もと</sup>情報として使うこととした。このウェブサイトなどによれば、全国には「風」の字を含む2の市区町村名と、「風」の字を含む140の町域名（概ね大字名<sup>おおあざ</sup>に相当）がある（2021年4月現在）。大字より小さい、字<sup>あざ</sup>レベルの地名リストは手元にないが、もしそれを加えるなら、全国には膨大な数の風地名が存在すると思われる。さらに言えば、字<sup>あざ</sup>名にもなっていない風地名も相当数に上ると考えられるし、「六甲おろし」や「筑波おろし」のような、地方風（局地風）に由来して「風」の字を含まない、その土地固有の地名があるかもしれない。

しかし、紙数の都合や、筆者の力量などから、本稿ではそれら小さな風地名や、「風」の字を含まない固有地名は対象外とし、町域名以上の大きさの、すなわち、ほぼ大字名レベルに相当する風地名を対象にすることとした。

そして、それらの風地名について、地名研究の古典かつバイブルとも言える吉田東伍の『大日本地名辞書』（全8巻）（初版、1906年）<sup>5)</sup>（写真1）を主な手引書として、その地理学的・民俗学的な意味合いを探ることとする。



写真1 『大日本地名辞書』(全8巻)

同書は主に語源や土地の歴史に注目して全国の地名(北方領土や旧植民地・併合地を含む)を網羅したもので、大判のB5判1000頁内外の書が8巻(索引など1巻を含む)からなり、総計1万頁にも及ぶ文字通りの大著である。この研究によって、近世末から近代初頭頃にかけての、全国各地の地名に関する日本人の記憶をたどることができる。

## II 風をつく市区町村名

前述したように、風の字を含む市区町村単位の地名は全国に2ある。青森県下北郡風間浦村と、沖縄県島尻郡南風原町である。まずは、それらの地名の由来や意味についてまとめよう。

### 1. 青森県下北郡<sup>かざまうらむら</sup>風間浦村

当村は青森県下北半島北部に位置する(後掲図1)。恐ろ山地を構成する山々が海岸近くまで迫り、わずかに残る平野部に集落が点在する。中心となるのは、下風呂<sup>しもふろ</sup>、易国間<sup>いこくま</sup>、蛇浦<sup>へびうら</sup>の3集落で、下風呂地区は古より湯治場として知られてきた。1889(明治22)年4月、下風呂村、易国間村、蛇

浦村の合併により、それぞれ1字を取って風間浦村となった<sup>6)</sup>。

つまり、風間浦の名称は旧3か村の名の語呂合わせであるが、そのうち「風」の字は、旧下風呂村を起源としている。それでは、下風呂の語源は何か。『第7巻（奥羽）』の「下風呂」<sup>シモフクロ</sup><sup>7)</sup>の項には次のように記されている。

今、易国間、<sup>ジャウラ</sup>蛇浦<sup>8)</sup>と合せて、風間浦村と改む。大畑の西北三里、海崖壁立、殊に劍矛列植の状を為す、熱湯あり。

鉱泉志云、下風呂の硫黄泉は、高熱百四十度より百六十度の間に在り、泉竅数所、村の中央を大湯と唱へ、南の山腹を新湯と称す、共に筧を架して浴室に導く。

温度は摂氏(°C)でなく、華氏(°F)と思われる。約60～70°Cの硫黄泉が村内各所から湧出することから、「風呂」の呼称を生じ、村名になったという。なお、下風呂の「下」の字に言及はなく、上風呂に対する下風呂なのか、あるいは別の意味が込められているのかは追跡できない。

このように、下風呂、翻って風間浦の「風」は、文字通りの風ではなくして、風呂の一字を取ったものである。

## 2. 沖縄県島尻郡南風原町<sup>はえばるちよう</sup>

当町は沖縄本島の南部に位置する（後掲図1）。南風原町のホームページでは、「(前略)現在の南風原町の境界は、明治41(1908)年の特別町村制の施行により定まり、11字からなる南風原村が形成されました。今次大戦で焦土と化した南風原村も、昭和21(1946)年に村役場の再編とともに復興の第一歩が始まり、畜産を中心とした農業、織物などの生産が村の発展の原動力となり、近年は那覇市に隣接する地の利を得て、工業や企業の進出により着実に発展を続けてきました。昭和55(1980)年には16行政区をもって町政への移行を成し遂げ、以来田園都市をめざした諸施策が展開され、平成25年度現在では19行政区となっています。』<sup>9)</sup>と紹介されている。つまり、明治41年に11の字<sup>あざ</sup>からなる南風原村が成立し、昭和55年に町政移行したことが記されている。しかし、「南風原」の語源や由来については

町のホームページにはふれられていない。

一方、『第8巻（北海道・樺太・琉球・台湾）』の「南風原村」<sup>10)</sup>の項で、吉田東伍は次のように記している。

真和志村<sup>マフシ</sup>の西、大里村<sup>オホサチ</sup>の東に隣し、其北は中頭郡西原村及び首里区と堺す、「ハヘ」は南の義にして「ニシ」（北の義）に対す、ハヘ原、ニシ原もと共に首里の城内たり相接して南北に位置するを以て名を得たるなり、人口八千。

つまり、ハエ（ハヘ）は南の意であり、南の原からきたところの地名だとする。また、東伍は指摘していないが、沖縄方言では南の方角も、南からの風もともにハエ（ハヘ）である。南風原町（旧南風原村）では、ハエバルを南風原と「風」の字を入れて表記してきたが、東伍の説明にしたがえば、南風の原ではなく、南の原、すなわち「南原」が語源であると思われる。

なお、沖縄方言のバル（原）はハリ（壘）の転訛で、開壘によって拓いた新たな土地を意味している<sup>11)</sup>。つまり、南風原町の「南風原」は、「首里城の南に開壘した土地」というほどの意味となろう。よって南風原町も、青森県の風間浦村と同様に、本稿の定義する風地名からは除外されよう。

ちなみに言えば、旧南風原村が村名を「南原」でなく、「南風原」としたわけは、「南の開壘地」では風情も面白味もないので、「南風のそよ吹く野原」という粋な表記を取ったのだらうかとも思料される。

### Ⅲ 風のつく町域名

#### 1. 風地名の多い地域

表1は町域名単位で風のつく地名（全国140）をまとめたもの、図1はその分布と、風間浦村、南風原町の位置を示したものである。

表1 全国の風地名（町域名単位）

1 風烈布（北海道枝幸郡枝幸町）	37 風間（山形県山形市）
2 音別町風連（北海道釧路市）	38 風神下（福島県白河市）
3 明日風（北海道札幌市手稲区）	39 風神山東（福島県白河市）
4 松風町（北海道沙流郡日高町）	40 耻風（福島県南会津郡南会津町）
5 二風谷（北海道沙流郡平取町）	41 春風台（茨城県つくば市）
6 松風町（北海道苫小牧市）	42 光風台（茨城県取手市）
7 風連町旭（北海道名寄市）	43 松風台（栃木県宇都宮市）
8 風連町池の上（北海道名寄市）	44 風見（栃木県塩谷郡塩谷町）
9 風連町大町（北海道名寄市）	45 風見山田（栃木県塩谷郡塩谷町）
10 風連町新生町（北海道名寄市）	46 風口（群馬県甘楽郡下仁田町）
11 風連町瑞生（北海道名寄市）	47 風布（埼玉県大里郡寄居町）
12 風連町中央（北海道名寄市）	48 屏風（埼玉県北葛飾郡杉戸町）
13 風連町東生（北海道名寄市）	49 風渡野（埼玉県さいたま市見沼区）
14 風連町豊里（北海道名寄市）	50 風布（埼玉県秩父郡長瀨町）
15 風連町仲町（北海道名寄市）	51 松風台（埼玉県東松山市）
16 風連町西風連（北海道名寄市）	52 風戸（千葉県市原市）
17 風連町西町（北海道名寄市）	53 光風台（千葉県市原市）
18 風連町日進（北海道名寄市）	54 風早（千葉県柏市）
19 風連町東風連（北海道名寄市）	55 北風原（千葉県鴨川市）
20 風連町北栄町（北海道名寄市）	56 寒風（千葉県佐倉市）
21 風連町緑町（北海道名寄市）	57 風祭（神奈川県小田原市）
22 風連町南町（北海道名寄市）	58 松風台（神奈川県茅ヶ崎市）
23 風連町本町（北海道名寄市）	59 松風町（神奈川県平塚市）
24 上風連（北海道野付郡別海町）	60 光風台（神奈川県横須賀市）
25 松風町（北海道函館市）	61 松風台（神奈川県横浜市青葉区）
26 松風（北海道夕張郡栗山町）	62 風呂屋町（富山県高岡市）
27 松風（北海道勇払郡むかわ町）	63 清風町（富山県富山市）
28 下風呂（青森県下北郡風間浦村）	64 田畠風見台（富山県富山市）
29 風合瀬（青森県西津軽郡深浦町）	65 山中温泉風谷町（石川県加賀市）
30 衣川西風山（岩手県奥州市）	66 西海風戸（石川県羽咋郡志賀町）
31 大釜風林（岩手県滝沢市）	67 西海風無（石川県羽咋郡志賀町）
32 一迫西風（宮城県栗原市）	68 門前町風原（石川県輪島市）
33 本吉町風越（宮城県気仙沼市）	69 風尾町（福井県福井市）
34 浦戸寒風沢（宮城県塩竈市）	70 風巻町（福井県福井市）
35 南方町風張（宮城県登米市）	71 風間（長野県長野市）
36 角館町大風呂（秋田県仙北市）	72 松風町（岐阜県岐阜市）

73 風の杜（静岡県湖西市）	107 甲子園浦風町（兵庫県西宮市）
74 松風町（愛知県豊川市）	108 甲風園（兵庫県西宮市）
75 松風町（愛知県名古屋市長和区）	109 甲子園春風町（兵庫県西宮市）
76 篠の風（愛知県名古屋市長緑区）	110 松風町（兵庫県西宮市）
77 風呂町（三重県桑名市）	111 屏風（奈良県磯城郡三宅町）
78 屏風（滋賀県犬上郡多賀町）	112 北風呂町（奈良県奈良市）
79 清風町（滋賀県大津市）	113 南風呂町（奈良県奈良市）
80 加茂町勝風（京都府木津川市）	114 風屋（奈良県吉野郡十津川村）
81 裏風呂町（京都府京都市上京区）	115 津風呂（奈良県吉野郡吉野町）
82 丁子風呂町（京都府京都市上京区）	116 風市（和歌山県紀の川市）
83 風呂屋町（京都府京都市上京区）	117 屏風丁（和歌山県和歌山市）
84 柳風呂町（京都府京都市上京区）	118 延風（岡山県真庭市）
85 杉阪道風町（京都府京都市北区）	119 安芸津町風早（広島県東広島市）
86 風早町（京都府京都市下京区）	120 風呂ヶ迫町（山口県宇部市）
87 順風町（京都府京都市下京区）	121 阿波町寒風（徳島県阿波市）
88 嵐山風呂ノ橋町（京都府京都市西京区）	122 風袋町（香川県丸亀市）
89 日野西風呂町（京都府京都市伏見区）	123 風早町（愛媛県今治市）
90 風呂屋町（京都府京都市伏見区）	124 石風呂町（愛媛県松山市）
91 勸修寺風呂尻町（京都府京都市山科区）	125 南風台（福岡県糸島市）
92 光風台（京都府長岡京市）	126 風師（福岡県北九州市門司区）
93 松風台（大阪府泉佐野市）	127 西彼町風早郷（長崎県西海市）
94 松風町（大阪府岸和田市）	128 木風町（長崎県佐世保市）
95 緑風台（大阪府四條畷市）	129 白南風町（長崎県佐世保市）
96 清風荘（大阪府豊中市）	130 南風崎町（長崎県佐世保市）
97 光風台（大阪府豊能郡豊能町）	131 風頭町（長崎県長崎市）
98 新光風台（大阪府豊能郡豊能町）	132 順風新田（大分県宇佐市）
99 楠風台（大阪府富田林市）	133 風成（大分県臼杵市）
100 浜風町（兵庫県芦屋市）	134 本匠風戸（大分県佐伯市）
101 仁川清風台（兵庫県宝塚市）	135 風呂本（大分県別府市）
102 八多町屏風（兵庫県神戸市北区）	136 風田（宮崎県日南市）
103 松風町（兵庫県神戸市須磨区）	137 勝連南風原（沖縄県うるま市）
104 松風台（兵庫県神戸市垂水区）	138 東風平（沖縄県島尻郡八重瀬町）
105 風深（兵庫県篠山市）	139 南風見（沖縄県八重山郡竹富町）
106 風深（兵庫県篠山市）	140 南風見仲（沖縄県八重山郡竹富町）

注) 2021年4月現在(30の衣川区西風山を「衣川西風山」に訂正)

〔出所〕「地名辞典オンライン」などによる。

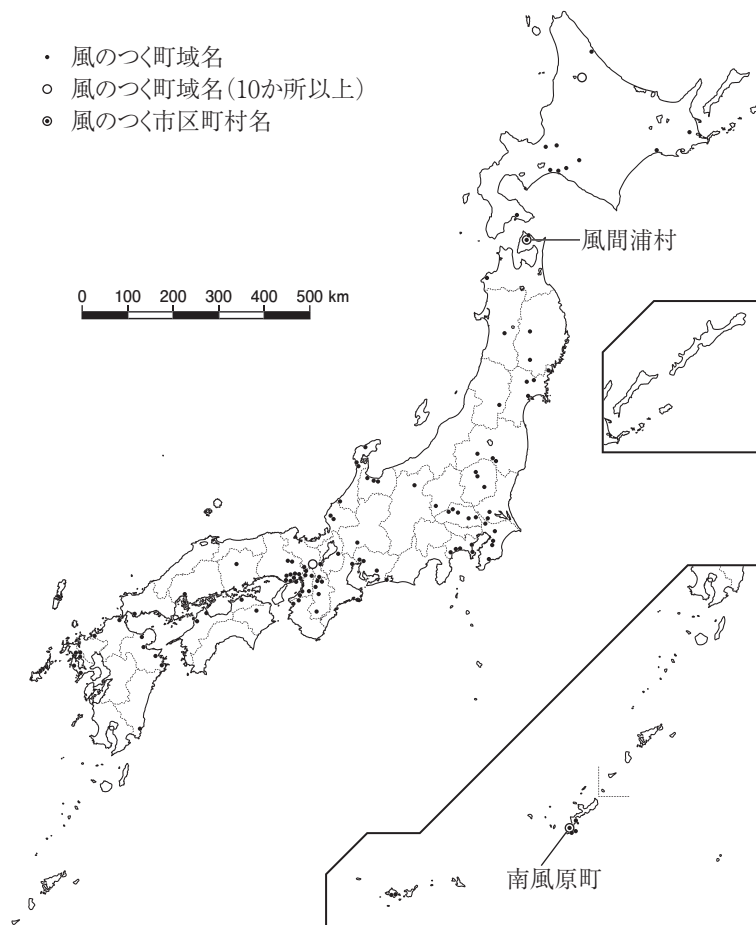


図1 全国の風地名（町域名・市区町村名単位）

注) 2021年4月現在

〔出所〕「地名辞典オンライン」などによる。

図1を見ると、関東平野、関西圏、北九州西部などに比較的多く分布しているが、顕著な傾向とまではいかないかもしれない。一方で、日本海側の各地は、北九州西部と北陸の一角を除くと、ほとんど分布の見られない空白地帯となっている。また、瀬戸内地方にも点在はしているものの、分布の状況は概して希薄である。



関西圏に風のつく地名が多いことの一因は、京都市や奈良市に「風呂」の語を含む地名が多いことによる。すなわち、81、82、83、84、88、89、90、91、112、113、115などが該当する。風呂が本稿に言う「風」に関する地名であるのかどうかは後に検討するが、平安以来の風呂文化が比較的濃密に継承されてきたことが、上方に風呂のつく地名を生じさせた一因と言えるのではあるまいか。

一方、関東平野に風のつく地名が多い理由は、これも後に検討するが、「上州名物からっ風」と言われるように、文字通りの風が関係している可能性がある。風が強いのは富山の砺波平野なども同じで、自然現象の風が、北陸を風のつく地名の多い地域にしているのかもしれない。これらの地域（関東平野、砺波平野など）は防風林、防砂林の備えが発達してきた全国屈指の地域だが、これらの生活文化や民俗事象と、風のつく地名は一定の相関を持つと考えられる。

## 2. 最も多い「松風」

最も多い風地名は「松風」、もしくはこれを含むもので、全国に18ある（表1）。表中の番号では、4、6、25、26、27、43、51、58、59、61、72、74、75、93、94、103、104、110番が該当する。このうち、「松風」単体が2例、「松風町」が10例、「松風台」が6例で、その読みを見ると、松風と松風町では12例すべてが「まつかぜ」と訓読みするが、松風台は「まつかぜ」の訓読みが3例、「しょうふう」の音読みが3例ある。

『第1巻（汎論・索引）』<sup>12)</sup>によると、表1中の事例については、「松風」<sup>マツカゼ</sup>が尾張に1例挙げられているほかは、他の用例について採録されていない。その全国唯一の用例である尾張（愛知県）の「松風」は、『第5巻（北国・東国）』の「大高城址」<sup>オホタカ</sup><sup>13)</sup>の項に取り上げられており、以下のように書かれている<sup>14)</sup>。

永禄十年紹巴紀行<sup>15)</sup>云、大高城より水野防州迎舟を熱田加藤の庭に押入たり、思ふ方の風吹きて、舷を叩き唄ひかはし、大高に入る、是は銘城にて、唐人の伝詩を贈りし所也、城は松風<sup>マツカゼ</sup>の里、麓は呼つぎの浜なり、

呼続ぎの浜べや霧にわたし舟、

(後略) (傍点は筆者)

このうち、「松風」の語義ついでに言及すれば、おあつらえ向きで、よい風向の風(つまり「思ふ方の風」)がここでいう松風であるが、その風を受けて舟航がうまくいったことにより、大高城を「松風の里」と呼んだという。転じて、やがて付近の地を松風と呼称するようになったと思われる。

ただし表1で、75番の愛知県名古屋市昭和区松風町<sup>まつかぜちょう</sup>は、大高城(大高城址)からはやや離れた場所にあり、両者がまったく同一の地点というわけではない。しかし、国土的スケールからみれば、近似の位置関係にあるということはできよう。名古屋市昭和区松風町は、この土地にみられた文字通りの風、しかも縁起の良い風に由来する地名ということができるとはなからうか。

なお、松は松竹梅の松であり、そもそも縁起のよいものであるから、風という爽やかなものと合わさった熟語を生みやすかったのだろうと考えられる。それゆえに、「松風」の地名が全国に多い理由が理解されようし、「松風台」が多くあるわけも解釈されよう。すなわち、「～台」は涼風吹き抜ける気持ちよい高台であり、新興住宅地(分譲住宅地)にしばしばつけられる名となっている。現代版の<sup>げん</sup>験担ぎの地名であり、起源の新しいものと考えられる。それゆえに、この松風台を含む同種の地名が全国各地に多く発生し、事例を増やしていったのではないかと思われる。

### 3. いくつかの事例

以上のように、全国に最も多い風地名は「松風」であった。つぎに、その他で比較的用例の多い、いくつかの事例についてみていこう。

#### ① 北海道の風地名

北海道にもいくつかの風地名がある。表1では多い順に、「風連」「松風」「風烈布」「明日風」「二風谷」などだが、その多くが「風連」によって占め

られており、さらにその大半が名寄市に集中している。これは旧上川郡風連町が、平成 18（2006）年 3 月に名寄市に吸収合併されて以後、旧町名の「<sup>ふうれんちょう</sup>風連町」を新地名の表記に組み込むようにしたため、7 番から 23 番がこれに該当する。

まず、この「風連」についてみてみよう。

### <sup>ふうれん</sup> 風連

旧風連町の「風連」について、『第 8 卷（北海道・樺太・琉球・台湾）』は、「<sup>フウレ</sup>風連川」<sup>[6]</sup>の項で次のように書いている。

名寄駅の南西一里に於いて、天塩川に会する一支流にして、イトイ<sup>ヌヅ</sup>岳方面に水源を有す。下流の地は、上川平野の中心の一部を成す。

此処に植民地選定せられ、南方は田寄りの原野に接し、ポンタヨベツの辺に、風連停車場あり、名寄五哩、士別四哩。（下線は東伍、傍点は筆者）

文中で、下線はアイヌ語の固有名詞である。「風連」はフウレ（アイヌ語）の当て字とみられるが、そのあたりのことは書かれていない。今日、「風連」はフウレンと読むが、これは漢字を当てたために、後に読みが転訛したものと思われる。

さて、<sup>フウレ</sup>風連は天塩川支流の川の名であり、合流点付近の上川平野の一角に明治の入植地が定められた。これが風連地区の成り立ちであると、東伍は指摘しているのである。つまり、風連の「風」に、日本語の風の意味はない。

### <sup>にぶたに</sup> 二風谷

前掲した風連、松風、風烈布、明日風、二風谷のうち、少なくとも項を立てて東伍が記述している風地名は、「<sup>フウレ</sup>風連」と「<sup>ニフタニ</sup>二風谷」の 2 例のみである。松風、風烈布、明日風など、『大日本地名辞書』は取り上げていない。

二風谷はアイヌ集落の一つとして今日も著名であり、北海道内でアイヌ人の比率が最も高い地域とされている。もとのアイヌ語地名はニブタニ（Niptani）であり、19 世紀初頭の史料において確認できる地名であるとい

う<sup>17)</sup>。その「ニフタニ」について東伍は次のように書いている<sup>18)</sup>。

二風谷村といひ、平取村の北約一里、沙流川の左岸に在り、地肥えたれば農業行はる。松浦氏紀行<sup>19)</sup>曰、カンカン（東川、人家三軒有、源エサヲマカンカン岳と云）、越てビハウシ（東川、畑有人家十五軒）、ヲホウシナイ（西川）、クロマトマナイ（同）、文化度、金丁を<sup>(ママ)</sup>入れて金を掘し跡あり、其<sup>サカツキ</sup>辺り曠石多く捨たり。ニフタニ（東小川、畑有、人家二十七軒）、名義、昔、此処の細工人木太刀を作り、其柄に金物を三つ附て奉りしと云故事有。（後略）（下線は東伍）

引用後段の故事によれば、昔、ここに細工の上手なアイヌがいて、木太刀を作って、その柄に金物を三つ付けて奉ったので、ニフタニ（ニプタニ）というのだという。つまり、ニフタニ（ニプタニ）は、「柄を作った場所」というほどの意味を持つアイヌ語のようである。また今日、二風谷の二風はニブと濁って発音されるが、ニフもしくはニブと清音または半濁音がアイヌ語に近い発音と思われる。

引用の前段からすると、このあたりの土地で金目の鉱石が多く採掘されたので、その金属（金物）を木太刀の飾りに用いたのではないかと考えられる。アイヌは今日も、木工を生業とする人たちが多く、そうした代表集落の一つが二風谷であったと言えよう。つまり、ここにも日本語の風の意味はない。

## ② 「風呂」のつく地名

前述したように、青森県下北郡風間浦村<sup>かざまうらむら</sup>の節で、合併前の旧下風呂村<sup>しもふろむら</sup>の一例が出てきたが、全国には「風呂」のつく町域名が意外に多い（表1）。すなわち、28、36、62、77、81、82、83、84、88、89、90、91、112、113、115、120、124、135番と、計18例、率にして全体の約13%を占める。風呂は「風」の字を含むが、風とどのように関係するのだろうか。あるいは、風と特段の関わりはないのだろうか。

そうした観点から、風呂と風との関係を語源レベルで探ってみたい。た

だし、吉田東伍『大日本地名辞書（全8巻）』からは、そのヒントが得られなかったので、ここではまず、風呂の一般的な語義からこの問題に接近したい。

「語源由来辞典」は、「風呂」の語源を次のように説明している<sup>20)</sup>。

風呂の語源には、物を保存するために地下に作った部屋の「室（むろ）」からとする説。茶の湯で湯を沸かすための「風炉（ふろ）」からとする説。「湯室（ゆむろ）」が転じたとするなど諸説ある。

風呂は平安時代末頃から存在したが、蒸気を用いた蒸し風呂形式のものをいった。湯をはって浴槽につかる形式の風呂は江戸初期から現れるが、「湯屋（ゆや）」「お湯殿（おゆどの）」といって「風呂」と区別されていた。

風呂の正確な語源は未詳であるが、用いられた形式を考慮すると「湯室」の説は考え難く、お茶の「風炉」も「湯」を主に考えると難しいため、「室」の説がやや有力と考えられる。

つまり、風呂の語源はムロ（室）の可能性が高いというわけだが、筆者もこの考えに同感である。そして、風呂の古い形式である、サウナ風呂様の「湯穴」や「石風呂」について、現地調査を交えてこれまで何度か報告したことがある<sup>21)</sup>。

こうしたことから、全国に比較的多くみられる風呂のつく地名は、物理的な風とは無縁なものだということができる。

### ③ 索引からの接近

以上、風を含むいくつかの地名のうち、出現頻度の比較的高いものについてその語源を検討した。しかし、アイヌ語地名を母体とする北海道の地名も含めて、風と直接関係がありそうな地名はそれほど多くないことがわかってきた。そこで今度は、『第1巻（汎論・索引）』における索引から、風を頭文字<sup>22)</sup>に持つ地名を確認していきたい。漢字索引の「風部」<sup>23)</sup>には、以下36例が挙げられている。

風戸（上総）、風日祈宮〔風宮〕、風本（壱岐）、風本浦〔勝本浦〕、風穴（駿河）、風穴（駿河）、風穴（下野）、風合瀬（陸奥）、風早（紀伊）、風早（武蔵）、風早（下総）、風早荘（下総）、風早浦（安芸）、風早浦（伊予）、風早郡（伊予）、風早郷（壱岐）、風見（下野）、風波見（越後）、風宮（伊勢）、風宮崎（尾張）、風流島（肥後）、風速国（伊予）、風速郷（安芸）、風張（羽後）、風捲神社（越後）、風猛山（紀伊）、風祭（相模）、風森（伊賀）、風森（紀伊）、風森（大隅）、風渡野（武蔵）、風越山（信濃）、風越嶺（信濃）、風間（信濃）、風間（羽前）、風間神社（信濃）  
（（ ）は旧国名、〔 〕はその項目を含む大項目、下線は筆者）

このうち、下線を引いたのは表1に示した町域名と一致するもの、破線は一致はしないが、関係があると考えられるものである。下線は8、破線は4あるが、ここでは直接町域名となっている8例について、東伍の記述をみていこう。以下、順に要点のみをまとめる。

風戸（上総）（千葉県市原市）は『第6巻（坂東）』611頁に記述があるが、「風」の由来については特段の記載がない。風早（下総）（千葉県柏市）は同717頁に記述があり、風早神の祠について指摘されているが、その語源については言及がない。風見（下野）（栃木県塩谷郡塩谷町）は同1025頁に記述があり、土着の家系に風見新右衛門らの一派のあることが指摘されているが、その語源については言及がない。風渡野（武蔵）（埼玉県さいたま市見沼区）は同526頁に記述があり、鷲明神の存在について指摘されているが、その語源については言及がない<sup>24)</sup>。風間（羽前）（山形県山形市）は『第7巻（奥羽）』に記述があり、風間が要害の地にあることを指摘しているが、その語源については言及がない。

このように、以上5例はその地名が、本稿の言う風地名であることが確認できないものである。以下、残る3例についてみていこう。

#### 風合瀬（陸奥）

青森県西津軽郡深浦町の風合瀬については、別稿<sup>25)</sup>でも取り上げたことがある。東伍は『第7巻（奥羽）』の「風合瀬」<sup>26)</sup>の項で、次のように書いている。

今、大戸瀬村の大字にて、其海上に鳥居崎と称する岬角あり、此辺は、地方恒吹の南東風と北風の交会して、無風の態状を呈する所といふ。

つまり、<sup>かそせ</sup>風合瀬はカザハセ（筆者注、ハセは「<sup>はさ</sup>挟む」の名詞形）の転訛であって、その意味としては異なる風向きの風（筆者注、南東からの暖かな海風と、北からの冷たい「岩木のおろし」）が邂逅する地点に名づけられたものである。南北の風が相和して、局地的な無風状態をつくり出し、それが地名になったものようである。「風の吹かない風地名」ということで逆説的だが、典型的な風地名の一つに挙げられよう。

### <sup>カザマツリ</sup>風祭（相模）

神奈川県小田原市の風祭については、『第6巻（坂東）』の「風祭」<sup>27)</sup>の項で次のように書いている。

（前略）回国雑記<sup>28)</sup>曰、風祭の里と云る所にて、渡船さしよせけるとき、「船出て湊江近き里の名もげに白波の風祭かな」。（後略）

風祭という所で船に乗ったとき、なるほどここは（風が強く）白波が立っていたよ、というほどの意であろうか。この風祭の事例も、典型的な風地名の一つと言えよう。

なお、上の記述で東伍は自明のこととしてことさら触れていないが、風祭とは、主として二百十日、二百二十日、<sup>はつさく</sup>八朔などの台風の時期に、作物を風害から避けようとする祈願行事のことである。風籠り、風日待などといって、神社やお堂にお籠りする形が一般的で、各戸から一人ずつ出て飲食しながら祈願したり、念仏を称えたり、百万遍の数珠繰りをしたりする。関東から東北にかけては、風穴ふたぎといって団子をつくって家々の神棚に供える<sup>29)</sup>。

町域名としての風祭は、このような自然現象や民俗行事を土台としたものと考えられよう。

### <sup>カザマ</sup>風間（信濃）

長野県長野市の風間については、『第5巻（北国・東国）』の「<sup>マメシマ</sup>豆島」<sup>30)</sup>の

項で次のように書いている。

豆島村の大字風間カザマに八幡宮あり、式内水内郡風間神社なるべしと云ふ、風祭の下略にあらざや、不審。袋草子并に十訓抄等に、信濃の風祭の事見ゆ、此国は風早き所なれば、諏訪明神の社に、風祝カゼイワリを置き、日光をも見せしめず深く籠りて祈らしむれば、其年風静にして、農業の為によきを、自らすき間もあり日光をも見せつれば、風をさまらずして悪し、とある故事に拠れば、本社蓋風神にして、諏訪の末社にやあらむ。(傍点は筆者)

つまり、長野市風間の風間神社は、風祭に関係の深い社であろうと言っている。文中の風祝カゼイワリとは、風を鎮めるために風の神を祭る行事やその行事を司る神職のことであるが、信濃では風が強いため、諏訪大社にそうした神職を置いている。そうしたことから東伍は、風の強いこの地にある風間神社が、諏訪大社の末社ではないかと推測し、風間という地名の由来を解釈している。

このように長野市風間も、典型的な風地名の一つということができよう<sup>31)</sup>。

以上より、風を頭文字カゼに持つ地名のうち、『大日本地名辞書』が索引に置くものは36例で、うち8例が現在の町域名と一致するが、そのうちの5例は風とは無関係であるか、関係が確認できないものであった。風と直接関係し、しかもそれが現在の町域名に受け継がれているものは、青森県西津軽郡深浦町風合瀬、神奈川県小田原市風祭、長野県長野市風間の3例のみである。

これら3例から言えることは、日本人が風に強い関心を抱き、それが地名にまで反映される時は、どちらかと言えば風を厄介な存在として受け止めていることを示唆している。また、現在の町域名に関係しないものまで含めると、前掲したように「風早」「風速」などの地名が多くみられ、その字義から、強風に対する先人たちの恐れの様子を感じ取ることができよう。

なお、これらの風地名は全国に分布しているが、町域名として継承され



ているものは東日本にのみ見られる。これをして、しいて言えば、西日本よりも東日本において、風に対する様々な思いの強さを反映しているのかもしれない。

#### ④ 風向の選好

次に、日本人に好みの風向というものがあるのかどうかという問題を考えてみよう。そこで、表1の140例と市区町村名2例のうち、風向きを示す地名の事例について取り上げる。それらを北から順に示せば、衣川<sup>西</sup>風山（岩手県奥州市）、一迫<sup>西</sup>風（宮城県栗原市）、北<sup>北</sup>風原（千葉県鴨川市）、南<sup>南</sup>風台（福岡県糸島市）、白<sup>南</sup>風町（長崎県佐世保市）、南<sup>南</sup>風崎町（長崎県佐世保市）、勝連<sup>南</sup>風原（沖縄県うるま市）、東<sup>東</sup>風平（沖縄県島尻郡八重瀬町）、南<sup>南</sup>風見（沖縄県八重山郡竹富町）、南<sup>南</sup>風見仲（沖縄県八重山郡竹富町）、島尻郡<sup>南</sup>風原町（沖縄県）の11例となる。つまり、町域名レベルでは全体の約8%にあたる風地名が東西南北の風向きにこだわりを持つものであることが窺えよう（なお、表1中で、西<sup>西</sup>風連、東<sup>東</sup>風連など、風向きに関係のないものは除外したことは言うまでもない）。

これら11例を方位別に示せば、東風1、西風2、南風7、北風1であり、南風が他を圧倒している。しかし、これは全国的な傾向ではなく、沖縄を中心とする九州に集中しているので、地域性を反映しているように思われる。沖縄の南<sup>はえばる</sup>風原については前述したが、西日本から南日本にかけての地域で、この南風（ハエの風・ハイの風）をより強く意識していることが窺える。

この点に関連して、関口武は『風の事典』（前掲写真1、右端）で次のように述べている。「今回の風名調査を主体に、この風名（筆者注。ハエの風・ハイの風）の使用地点を拾いあげてみると、その数が最も多いのは広島・山口・福岡・佐賀・長崎・熊本・鹿児島・沖縄の南西日本の各地であり、全国約600カ所の使用例中の70%をしめている。（中略）各地からの報告に基づいて、ハエ・ハイの風としての性質を調べ、それを総括してみると、その「吹く季節は春から夏を通して秋までで、いわゆる夏の季節風である。南寄りが大部分であるが、南西風をさす場合も若干ある」となる。」<sup>32)</sup>と。

そして、それほどの強い風でもなく、海難等の危険もなく、特に関心のもたれるほどの風ではないと指摘している。

前述したように、東日本の風祭や風間が、ある種風への怖れに対する安寧の願いからつけられた地名であったのに対して、西南日本の南風（ハエの風・ハイの風）は、ごく日常のありふれた生活感覚に根ざした風とでも言えそうである。

以上の検討から、事例数の多少をもって、ただちに風向に対する日本人の選好を判断することは難しいと言えるかもしれない。

#### Ⅳ 風地名と日本人——結びにかえて——

本稿では、全国の風にまつわるいくつかの地名について考察した。まず、それらを簡単に振り返ってみよう。

市区町村名に用いられているものとしては、青森県下北郡風間浦村と沖縄県島尻郡南風原町の2例であるが、それらはいずれも自然現象としての風とは無関係に「風」の字が使われていた。

他方、町域名に用いられているものとしては、全国的に多い「松風」や「風呂」、北海道の「風連」や「二風谷」のほか、「風戸」「風早」「風見」「風渡野」「風合瀬」「風祭」「風間」などを主に検討した。このうち、自然現象の風との結びつきが窺えるものは、風合瀬（青森県西津軽郡深浦町）、風祭（かざまつり 神奈川県小田原市）、風間（かざま 長野県長野市）と、「松風」のうちの1例（まつかぜちょう 愛知県名古屋市昭和区松風町）の計4例があるのみで、他の事例については、吉田東伍の『大日本地名辞書』からはその由来を確認できなかった。

これらの事実は、日本人と風との関係の薄さを示唆しているのだろうか。

そもそも地名とは、土地に刻まれた先人の記憶である。この刻印がなければ、何気ない話をしようにも、場所がわからないわけであり、まさしく話にならない。地名とは、あまたある場所の呼び名の中で、先人たちに多く了解され、現在まで生き残った、かけがえのないものなのである。

その地名は、大別して自然地名と人文地名とに分かれるが、自然地名の多くは「地形地名」に分類される。地形地名とは、土地の地形的な特徴に基づいて命名された地名であり、日本にはこの地形地名がきわめて多い。一方で、風を含む自然地名（これを「気候地名」と呼ぶことができる）はもともと少数派だが、多くは菖蒲池あやめいけや野麦峠のむぎとうげのような「植物地名」に由来していたり、鯨波くじらなみや鯀沢かじかざわのような「動物地名」であったりする。地形も、植物も、動物も、目に見えるわかりやすいメルクマールである半面、目に見えず、止まることを知らない風を目印に、場所を語ることの難しさが感じられる。その意味で、「風が止む地点」につけられた青森県西津軽郡深浦町の「風合瀬かそせ」は、きわめてユニークな風地名と言えるものである。

ところで、本稿では冒頭に示した目的の中で、地理学・民俗学双方から「風」に込められた地名の意味を検討するとした。そのことから、風地名の持つ場所的意味や、全国の分布状況、日本人の生活誌との関連などを主な考察対象としてきた。

この点、風地名の持つ場所的意味については、概ね以下の事柄が確認できた。

まず、全国に最も多い風地名は「松風」であるが、それは「おあつらえ向きで、縁起の良い風」に由来するものである。その多くは「まつかぜ」と訓読みされるが、表記は同じでも「しょうふう」と音読みするケースもある。音読みの「松風」は比較的起源の新しいもので、ことに「台」の字をしたがえた場合、大半が新興住宅地につけられたものであるとみられる。日本古来の験担げんぎを新興地名によって具現したケースと言えよう。

これに対して、「風間」（長野県長野市）の事例は、耕作の邪魔をする風を農耕民が恐れ、忌み嫌い、なだめようとする地名として理解でき、「松風」のケースとは対照的である。また、「風祭」（神奈川県小田原市）も、これと同様の願いから名づけられたものと言え、民俗行事によって厄難を抑え込もうとしたことが「祭」の字に込められている。

一方で、風地名の全国的な分布状況や、地域による風向の選好には、顕著な傾向はみられないようであった。その中で、関東平野などに風地名が

比較的多いことを指摘できるが、関東や北陸における防風林や防砂林の発達をみれば、忌み嫌う対象としての風の姿が浮かび上がる。

つまり、「風」の字を含む風地名は、自然現象としての地理学的な語義よりも、むしろ生活事象と関連づいた民俗学的な語義によるものが多いように思われる。さらに言えば、以下にみる歌のように、日本人はある時は目以上に、民俗的な鋭い肌感覚をもって風に向き合ってきた。

秋来ぬと目にはさやかに見えねども 風の音にぞおどろかれぬる  
(藤原敏行朝臣)

目には見えない風の音に季節の移ろいを感じるという、その逆説的なまでの肌感覚に、日本人の感性のあり様を思い知らされる気がする。こうした感覚が「風」という、ある種、抽象的な存在を土地の呼称とさせてきたのだとも言えよう。

また日本では、風景・風俗・風潮・風紀・風物・風月・風情・風雅など、微妙なニュアンスのある熟語に「風」の頭文字（「粋」を醸し出す接頭語と呼んでもよい）を用いる文化が育ったように思われてならない。茶の湯で、湯を沸かす炉を「風炉」と呼んだのも「風」に風雅を感じるからこそであろう。また、穴倉のように味気のない室（風呂の語源）を「風呂」と呼んだのも、同じ感性からのように思われる。

そうした意味で、全国に数多くある「風呂」のつく地名も、自然現象を探る地理学的な見地からは風地名と言えないにしても、日本人の精神を訪ねる民俗学的な見地では、風地名の一種とすることができるのかもしれない。かくして、日本には数多くの風地名が存在し、先人たちの記憶を今に伝えているのである。

「風」の字を含む風地名には、文字通り物理的な風とそうでない象徴的な風とがあり、しかも、物理的な風の中にも、歓迎される風と、歓迎されざる風とがあった。してみる時、日本人がいかに「風」とともに生きてきた民族であるかが、これら多様な風地名の存在から窺い知ることができる。

前掲した「これらの事実は、日本人と風との関係の薄さを示唆しているのだろうか。」という自問は、否定的に自答されなければならないであろう。

## 注および文献

- 1) 吉野正敏『世界の風・日本の風』（気象ブックス）、成山堂書店、2008年、日下博幸・西嶋史「日本の局地風」日本風工学会誌、37-3、2012年、164-171頁など。
- 2) 「大字<sup>おおあざ</sup>」は今日ではあまり用いられなくなった地名概念・用語であることや、市町村合併が繰り返されたために、大字の範囲がわかりにくくなっているが、本稿では、「市区町村」のすぐ下に続く地名として「大字」を用いることとする（大字の下の地名は「字<sup>あざ</sup>」）。例えば、青森県南津軽郡藤崎町藤崎字西村井では「藤崎<sup>あざ</sup>」が大字、「西村井」が字である。また、愛媛県松山市宮田町では「宮田町」が大字、東京都千代田区霞ヶ関では「霞ヶ関」が大字に相当するものとする。

大字は本来、江戸時代の村を継承した範囲かつ地名であり、字は大字より小さい集落のまとまりにつけられた地名であった。明治以降、小さな村は何度も合併を繰り返し、今の市町村の大きさになったが、江戸時代の村は、今でも市町村内の大字や町名として残り、字は市町村によっては消滅した（以上、ゼンリン「地図から見えること「大字と字」」(<https://www.zenrin.co.jp/product/article/geography-180227/index.html>)を要約)による。
- 3) 郵便局（日本郵政株式会社）では、主に大字を「町域名」と呼び、郵便物の集配における住所の階層化を図っている（<https://www.post.japanpost.jp/zipcode/zipmanual/p39.html>）。
- 4) 「地名辞典オンライン」(<https://chimei.jitenon.jp/>)による（2021年4月6日検索）。
- 5) 吉田東伍『増補 大日本地名辞書』（全8巻）、富山房、1970年（初版、1906年）
- 6) ウィキペディアの「風間浦村」の項（<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%A2%A8%E9%96%93%E6%B5%A6%E6%9D%91>）を要約（2021年4月9日検索）。
- 7) 吉田東伍『増補 大日本地名辞書 第7巻 奥羽』、富山房、1970年、1031頁。
- 8) 東伍は蛇浦<sup>へびうら</sup>をジャウラと呼んでいるが、現在、ジャウラと読む事例は東伍のこの記述以外に見出せない。
- 9) 「南風原町の概要」(<http://www.town.haebaru.lg.jp/docs/2013041600021/>)による（2021年4月17日検索）。
- 10) 吉田東伍『増補 大日本地名辞書 第8巻 北海道・樺太・琉球・台湾』、富山房、1970年、575頁。
- 11) 「沖繩拝所巡礼・ときどき寄り道」([https://17020526.at.webry.info/201707/article\\_4.html#:~:text](https://17020526.at.webry.info/201707/article_4.html#:~:text))による（2021年4月17日検索）。
- 12) 吉田東伍『増補 大日本地名辞書 第1巻 汎論・索引』、富山房、1970年、293頁。
- 13) 大高城（おおだかじょう）は、尾張国知多郡大高村（現・名古屋市緑区大高町）にあった日本の城。桶狭間の戦いの前哨戦として、当時今川義元の配下であった松平元康

- (徳川家康)が「兵糧入れ」をおこなったことで名高い。現在は国の史跡に指定され、公園として整備されている。以上、「ウィキペディア」の「大高城」の項 (<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E9%AB%98%E5%9F%8E>) による (2021年4月17日検索)。
- 14) 吉田東伍『増補 大日本地名辞書 第5巻 北国・東国』、富山房、1970年、602頁。
- 15) 里村紹巴の『紹巴富士見道紀』のことが。安土桃山時代の著名な連歌師・里村紹巴が、永禄10(1567)年に京から富士山見物に旅立った時の紀行文である。
- 16) 前掲書10、185頁。
- 17) 「ウィキペディア」の「二風谷」の項 (<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%8C%E9%A2%A8%E8%B0%B7>) による (2021年4月18日検索)。
- 18) 前掲書10、255頁。
- 19) 松浦武四郎(1818～1888年)の書いた紀行文と思われる。武四郎は幕末から明治にかけての探検家・浮世絵師・著述家・好古家。雅号は北海道人(ほっかいどうじん)、多気志楼など多数。蝦夷地を探查し、北加伊道(のちの北海道)という名前を考案した。以上、「ウィキペディア」の「松浦武四郎」の項 (<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9D%BE%E6%B5%A6%E6%AD%A6%E5%9B%9B%E9%83%8E>) などを参考 (2021年4月19日検索)。
- 20) 「語源由来辞典」の「風呂」の項 (<https://gogen-yurai.jp/furo/>) による (2021年4月18日検索)。
- 21) 戸井田克己「屋久・種子の自然と民俗——青潮生まれる海域の瀬風呂と赤米神事を中心に——」、『民俗文化』、第21号、近畿大学民俗学研究所、2009年、143-218頁。戸井田克己「防長探訪記——山口で出会った人と物——」、『民俗文化』、第24号、近畿大学民俗学研究所、2012年、79-107頁。
- 22) ここで頭文字とは、熟語の文字列の最初の文字のことをいう。つまり、例えば「松風」や「二風谷」のように2文字目に風の字のつく地名や、3文字目、4文字目のそれは除外されている。そのような事例は、『大日本地名辞書』の漢字索引からはたどることができないが、もしそれを入れれば、風地名はさらに多くなる。しかし一方で、風景・風俗・風潮・風紀・風物・風月・風情・風雅などの熟語が1文字目に「風」の字を持つことからわかるように、地名の場合にも、「風」の字は1文字目にくるケースが多くを占めると考えてよからう。
- 23) 前掲書12、634-635頁。
- 24) 「角川日本地名大辞典」編集委員会編『角川日本地名大辞典 11 埼玉県』、角川書店、1980年、758-759頁では、フツノは女性器の古語である「ホト」の転訛であり、台地に挟まれたこの土地の形状が女性器を連想させるからだろうとの説が紹介されている。
- 25) 戸井田克己「北東北・風の民俗——風にまつわる生活と文化——」、『民俗文化』、第27号、近畿大学民俗学研究所、2015年、33-81頁。
- 26) 吉田東伍『増補 大日本地名辞書 第7巻 奥羽』、富山房、1970年、1078頁。
- 27) 吉田東伍『増補 大日本地名辞書 第6巻 坂東』、富山房、1970年、25頁。
- 28) 道興准后による古寺の巡歴記(1487年)のこと。著者が1486(文明18)年から翌年3

月まで、北陸、関東、奥州諸国を遊歴した際の紀行文で、当時の地方文化や交通路などを知る史料となる。以上、「ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典」の「廻国雑記」の項 (<https://kotobank.jp/word/%E5%BB%BB%E5%9B%BD%E9%9B%91%E8%A8%98-42383>) による (2021年4月19日検索)。

29) 「ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典」の「風祭」の項 (<https://kotobank.jp/word/%E9%A2%A8%E7%A5%AD-44140>) による (2021年4月18日検索)。

30) 前掲書 14、762 頁。

31) ことに風の強い関東甲信越では、風祭のためと称して獅子舞をすることもあり、長野県をはじめ諏訪信仰の広がる地方では、風を切るまじないである風切り鎌を棟や軒につけたりする。富山県には吹かぬ堂という風神堂が十数か所あり、そこで大風が吹かないよう祈る (以上、前掲 29 による)。

32) 関口武『風の事典』、原書房、1985年、74-75 頁